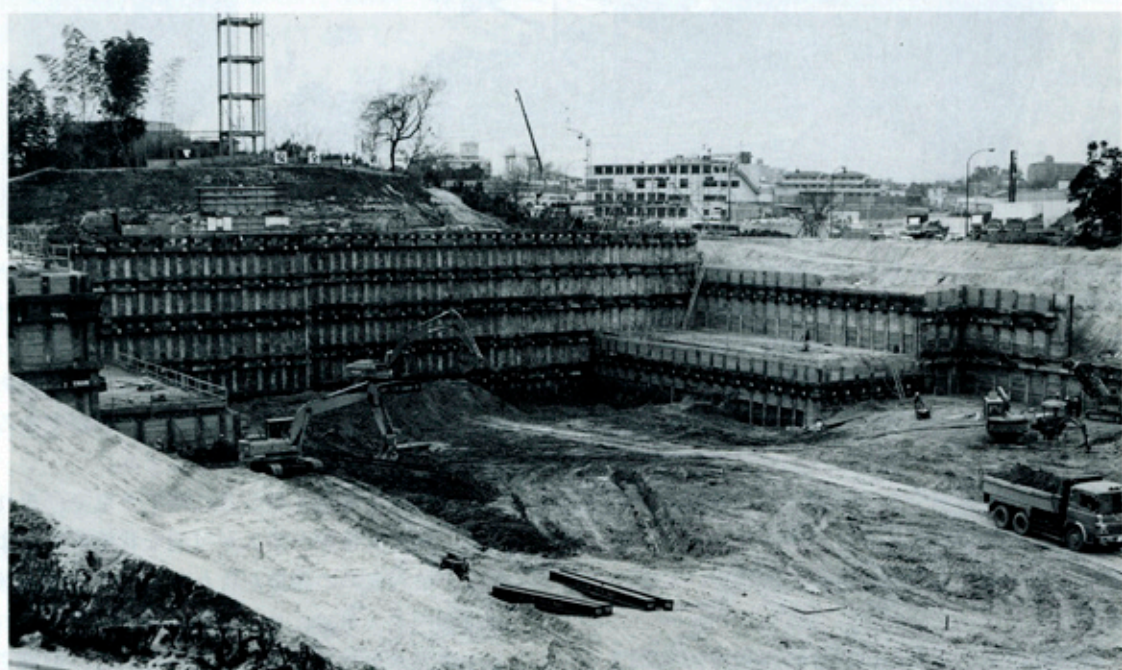




(仮称)吹田市立博物館

建設工事すすむ



◀ 建設工事中の博物館

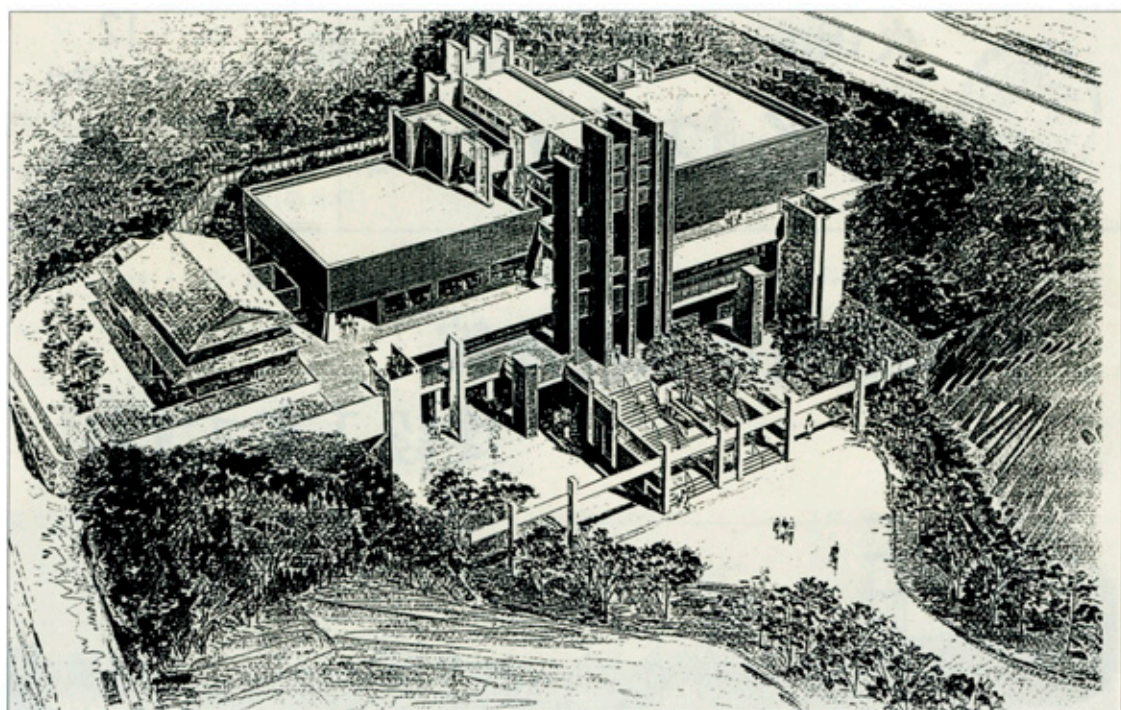
(仮称)吹田市立博物館は平成2年5月市議会の工事議決をうけて、5月29日に着工されました。昭和61年度の『基本構想』以来、幾多の論議を重ねて展示計画が練られ、昭和63年に基本設計に着手し、実施設計の完了を受けて市民待望の博物館の建設が、いよいよ始まったのです。

多くの市民の理解と協力を得て進められてきた埋蔵文化財の調査によって得られた出土品の数々、ひろく市民から寄贈していただいた民具、市史編纂の過程であきらかとなった古文書や美術工芸資料等を、様々な角度から展示、解説し、模型・レプリカ、視聴覚機器をも使って、市民

に公開する初めての専用施設です。

博物館は岸部北4丁目の紫金山公園の西の一角に建設が進められており、建物は鉄筋3階建て、諸室の延床面積は、3,288㎡の規模があります。現地のなだらかな丘陵地形を利用して、背後に緑の丘陵を配し、正面が釈迦ヶ池の水面に臨む地であって、その最上階が展示室となっています。

館内には3つの展示室があり、地域の原始古代から近現代までの歴史の流れを時代を追って展示した一般展示室、千里丘陵に産する良質な粘土を素材にした古墳時代の須恵器窯跡、古代



▲ 博物館の完成予想図
右隣の古民家は後年度事業

宮殿の瓦を焼いた七尾・吉志部瓦窯跡などの姿を、実物大の窯跡によって大規模な展示をした特別展示室があり、また、期間を限ってその都度、様々な企画の展示を行う企画展示室も設けられています。

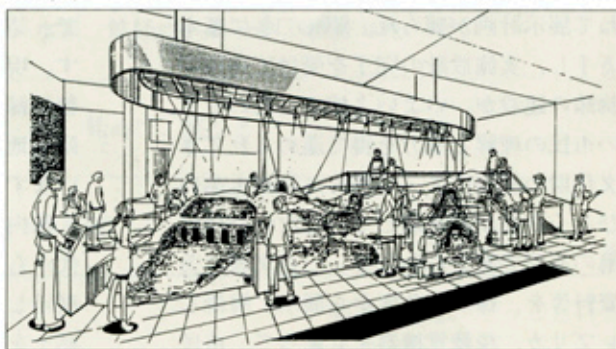
また、歴史講演会などに使われる講座室や映像によって学習するビデオテークコーナー、図書コーナーなどもひろく市民に御利用いただけます。

博物館の1・2階には、資料の調査研究部門と収蔵部門があります。年間の温度湿度の変化がほとんどなく、重要文化財などを収蔵できる特別収蔵庫、木器や鉄器の保存処理加工を行う保存処理室、文化財を虫や有害菌から守る資料燻蒸庫など、各種の文化財を保存するための特殊な設備も備えています。

博物館の建設されている紫金山公園は、平安宮造営のさいに、大規模な瓦窯が造築された地でもあり、史跡公園として市民に親しまれてきましたが、公園の拡大と再整備を目指して、今後、徐々に整備が進められてゆくことになっています。公園に

は、史跡以外にも、府の指定文化財となっています吉志部神社本殿や、古墳、佐井寺地区から移築された須恵器窯跡などの様々な文化財があり、丘陵を散策しながら、歴史の学習ができる素晴らしい公園になることでしょう。

博物館は、平成4年3月に竣工予定で、それ以後、重要文化財の搬入が可能な状態になるように、館内大気の調整が行われます。建設直後の建物内の大気は、コンクリートから放出される大量の水分やアルカリを含んでおり、収蔵された文化財が影響を受けることを防ぐ重要な作業であり、この作業が順調に進むと、平成4年の秋には開館の予定です。



▲ 特別展示室のイメージスケッチ

し せき な お が よう せき
史跡七尾瓦窯跡の
環境整備工事

史跡七尾瓦窯跡は岸部北5丁目10番地ほかにあり、昭和54年度の発掘調査で、聖武天皇によって大規模に造営された後期難波宮（大阪市中央区法円坂）に瓦を供給した官瓦窯であることがわかり、奈良時代の宮殿造営組織の研究に、貴重な資料を提供しています。

瓦窯は昭和55年3月に国の史跡に指定され保存されてきましたが、周辺住民やこの地を訪れた見学者に便宜をはかるため、以後、市は史跡の整備を文化庁に働きかけてきました。この環境整備事業が国庫補助事業として認められることとなり、平成元年度から環境整備工事に着手しました。

工事は2ヵ年にわたって継続され、平成元年度には、フェンス・石積み・排水工事などの基盤整備工事が実施されました。現在、平成2年度の工事として、公園施設の設置工事がなされ



◀環境整備に先だって行われた調査で確認された4号瓦窯の窯体

ており、園路や階段、植栽工事などが進められています。工事の内容は、史跡の全域を散策できるように、園路と階段を設置するとともに、窯跡の埋没している位置とその形を地表の配石と各種の植栽によって表示し、ここで大規模に操業されていた窯の配列が一見して分かるように、工夫されています。

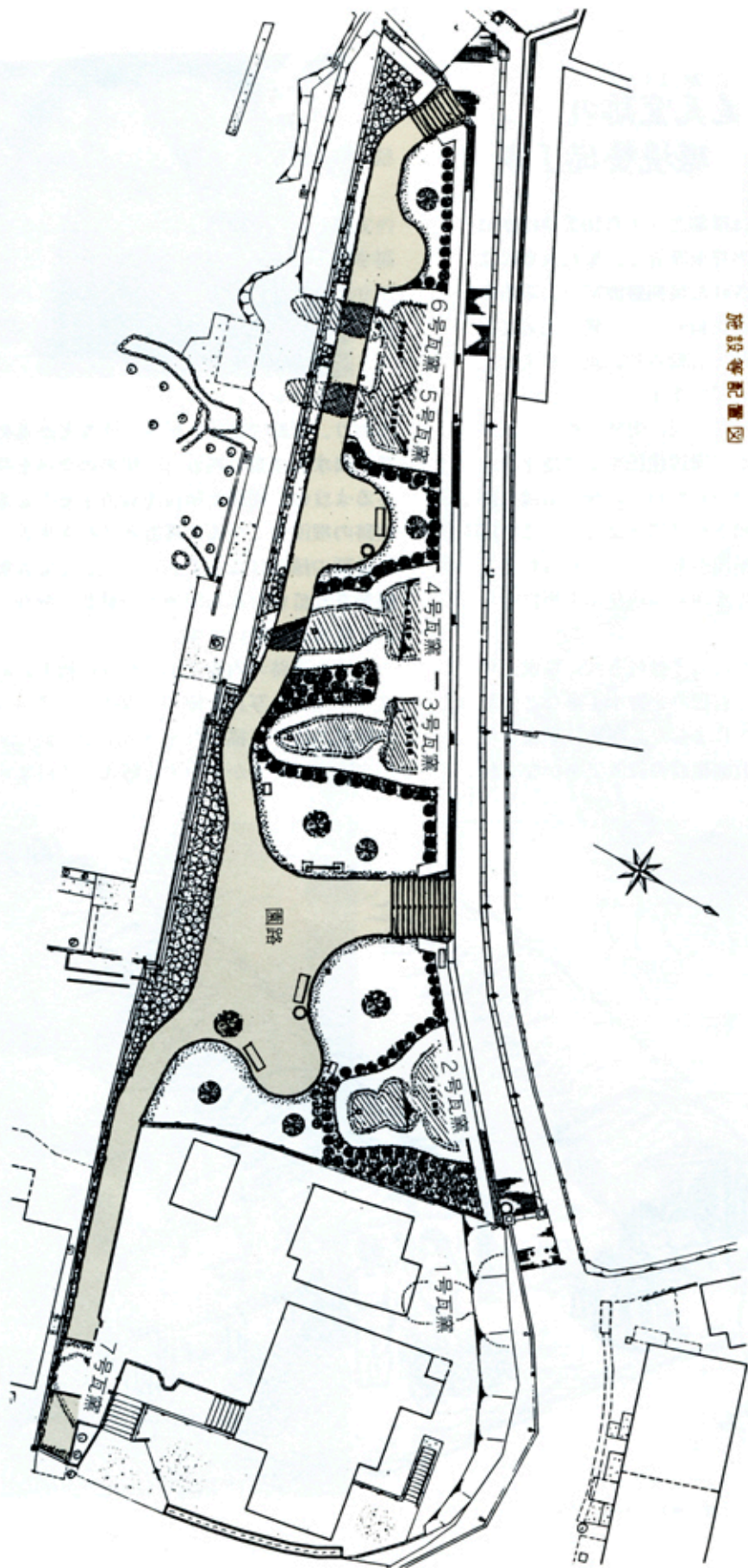
また、遺跡の内容を示した説明板も設置し、文章や図面・写真を使って説明し、さらに瓦窯の操業の様子を描いたイラストで、約1250年前の当時の姿をわかりやすく解説しています。



▲七尾瓦窯跡の第3・4号瓦窯の操業の様子

史跡七尾瓦窯跡

施設等配置図



金子雪操

吹田に隠棲した画人

1. はじめに

昭和60年度からの文化財調査の結果、市内には、近世に大阪を中心に活躍した画人の作品が多数残っていることがわかりました。今回はそういった画人のなかでも、吹田に居留して作画活動を行い、現在でも多くの作品を残している南画家の金子雪操を紹介し、彼の生きた時代の画壇の状況や文化的風潮を背景に、画人としての生き方とその作品をみることにします。

2. 金子雪操の生涯

金子雪操は、江戸の人で、寛政6年(1794)に生まれています。名は大美といい、幕府の臣犬塚氏の出ですが、金子氏の養子となり、幼少の頃、伊勢長島藩主増山河内守正賢に近侍として仕えます。この河内守正賢は、雪齋と号し、画事を好み特に花鳥画に巧みでした。大美は正賢の近くにあつて画の手ほどきを受け、その画法を学び、やがて、雪齋の雪の一字を貰い受けて雪操の号を授けられます。後に官を辞して剃髪し、自ら各半道人と号し、本格的に画事の道に入ります。雪操はまず、南画家で殊に山水画に優れていた銅雲泉に就いて画法を学び、その奥義を得ます。そして山水画の画法を刻苦工夫し、雪操独自の青緑山水法を開発します。

さらに中年になって京都に住み、加茂の書家に就いて書法を学びます。その後大阪に移り、堂島桜橋の裏長屋に住みます。ここでの暮らしぶりをみると、住居は甚だ狭く、日々の食にも事欠くことの多い貧困の生活でした。しかし、それを意に介さず、終日塵埃の中に座して古法帖をめくり、また画譜を写して、悠々自適の文雅の日々を送ります。

文人墨客ともみだりにまじわらず、また骨董家、表具師等との付き合いもなかった雪操は、優れた画技をもちながらも、作品はあまり売れなかったようです。この頃、平素特に親しく交遊していた八木巽處という人に頼み、自分の描いた小景山水図を金に換えていたという逸話が残っ

ています。

雪操が僅かばかりの家具類や雑具を船に積んで吹田に移ってきたのは、天保8年(1837)、雪操四十三歳の頃のことです。当時吹田村竹中知行所の支配役をしていた井内左門は、雪操の清直な人柄を愛し、吹田に招いて、ここに居を構えさせたといわれます。左門は経雨と号し、豊後の田能村竹田、江戸の市河米庵、安芸の頼山陽等、多くの文人墨客と交遊していたこの地の第一の文化人でした。雪操もこうした左門の知遇を喜び、8、9年吹田に寄寓し、その間に髪を蓄えて、妻をめとりました。

雪操はこの頃自ら「翠陀小隠」と号し、作品にもそのように落款を認めています。(写真下)翠陀は、「すいた」と読み、吹田と音が通じています。その号には、「吹田にちょっとばかり隠棲している者」といった意味が込められているの



◀「春景山水図」の落款・花押
落款は「己亥春咲雪操小隠雪操金大美」とある。

かもしれません。雪操の作品は吹田の寺社や旧家にいまもつたわっており、画人としての活動の足跡を残しています。

雪操はその後再び大阪に出て釣鐘町に住み、安政4年(1857)に咽喉病のため亡くなります。天王寺区勝山の清寿院に墓があります。(写真右)

3. 江戸後期の画壇と南画

次に金子雪操の活躍した頃の画壇についてみてみましょう。江戸時代中頃は、それまで主導的立場にあった流派は衰退の途をたどっていました。この低迷期のなか、画人たちは新たな絵画創造の道を模索しつつ、多種多様な試みを行っていきます。そして円山・四条派の写生画、復古大和絵派の絵画、西洋画の技法をとり入れた洋風画などが意欲的に描かれ、江戸後期の画壇は多彩な展開をとげていきます。金子雪操の描く南画もまたこのような江戸後期の新傾向のなかでうまれてきたひとつの画派なのです。

南画は画壇の停滞から抜け出すためのあらたな刺激剤を中国の南宗画に求め、その画法を学びながら生み出していったものです。南宗画とは中国の元末におこり明末に盛んになった絵画の一流派で、日本には長崎を通してその画論、画譜、作品が輸入されました。

江戸後期は美術だけでなく、学問・文学の世界においても中国に関心が向けられた時期で、中国趣味の横溢した時代でした。そしてその受容層が広がり、武士だけではなく、町人や村の有力農民のあいだにも普及していました。受容層の広範化もあって、中国南宗画を元とする南画も多くの日本人に愛好されるようになり、多数の南画家が輩出してくるのです。

初期の南画は確立した様式はなく、画家によって個性が指摘できますが、次第に江戸と京阪では異なった傾向が現れ、それぞれ主流を形成してきます。それは、双方の画人の経歴、社会的地位、画風等からその相違をみることができます。江戸の南画家は多くが武士で士官しており、様式も南宗画とそれ以外のものを折衷していて現実的気分の濃い作風です。それに対し、京阪の南画家は武士であっても脱藩、あるいは隠



▲金子雪操の筆塚 清寿院
筆塚の碑文は次のように誌されている。
▲「江都雪操金美高浪華、瘵返筆於此、安政丁巳歲自誌、
自誌之後、無幾病沒歲之八月後日也、春秋六十有四、
門人相謀、併瘞其柩、銘曰、
墨跡在世、精神踊躍、泉下所藏、維其精柏、
藤沢南書」



退していたり、町人の出身であったりと在野のものが多く、様式的にも南宗画に近く、隠遁的気分が作風に横溢しているといえます。もともと中国の南宗画は文人画の一様式であり、士大夫である文人の隠遁思想を精神的な拠り所としていますから、京阪の南画のほうが南宗画により近いといえるでしょう。

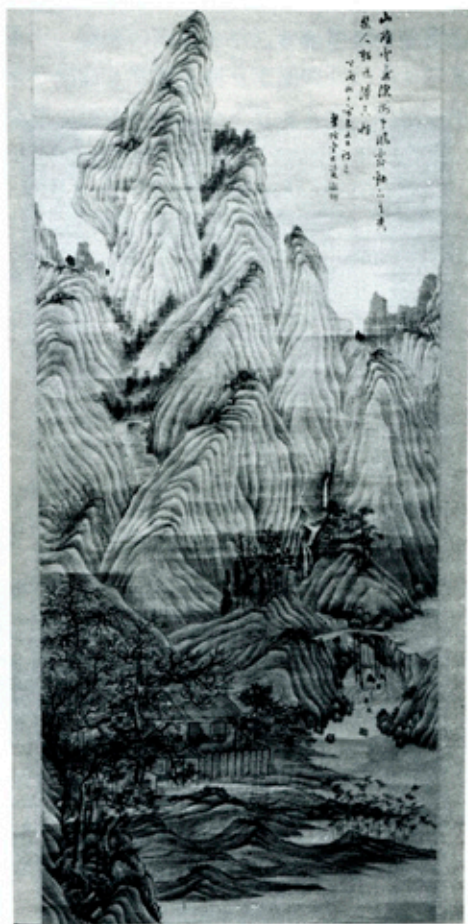
4. 雪操の南画

雪操は江戸の人ですが、官を辞して京阪に在住し、南画本来の自娛の精神を徹底して実践した画人といえます。その評価については、明治24年刊行の『近世画史』によると、「凡そ京拱の間、士大夫画を言う者は、皆な雪操を推し、正派と為す。(中略)然るに雪操を論ずるに至れば、則ち、猶、董巨の典型ありと謂う也」とあります。董巨とは南宗画の祖と仰がれている董源、巨然という2人の中国北宋初期の画家であり、これによってもいかに雪操が正統的な南宗画の技法と様式をもっていたかが推測されます。

このように南宗画の正派と称されている雪操ですが、彼は火災にあつて長年蓄えていた南宗画の粉本を悉く焼失するという経験をします。それからは粉本をもたず、弟子にも粉本を与え

ず、それぞれの意の欲するままに描かせ、その筆の運びや意匠の巧拙だけを指示したといえます。単に南宗画を技術的に模写するのではなく、その画を裏付けている精神をわがものとして身につけていればこそこのことなのでしょう。

次に雪操の作品の一例からその作風をみてみましょう。「春秋山水図」双幅(写真下)は、「翠陀」の落款があり、雪操が吹田在住の頃に描いたものです。山水図とは、その名のとおり山と川に代表される自然の景観を描いたもので、中国の士大夫が世俗を離れ、隠遁生活を送るにふさわしい理想の地を絵画化したものといわれます。この双幅の山水の風景からは中国風の趣が看取されるでしょう。殊に春景図には、遥かに遠山を振り返り仰ぎ見る杖を持った隠士と肩に荷物をつけた棹を担ぐ侍童の姿が描かれており、そ



▲「春秋山水図」双幅 早田家蔵

「春景山水図」(左幅)は天保十年(1839)、「秋景山水図」(右幅)は天保八年(1837)の作品。南宗画の祖、董源、巨然の正統的な画風を継承している。

の服装からも中国のものであることがわかります。また秋景図の手前に描かれた楼閣は、こういった隠士が文雅の日々を過ごす場であり、隠士の窓辺に佇む姿が描かれています。

その筆様をみるならば、披麻皴という麻皮のようなやわらかな墨線を重ねて山腹や土坡を描いており、ところどころに広葉樹を点在させて遠近感と実在感を表現しています。その描き方も、春景図ではなだらかな曲線で穏やかさを、秋景図では連続する鋭角的な線で険しさをと、季節感の相違を効果的に表しています。

このような雄大でかつ雅味に富む山水画は雪操が最も得意としたものですが、そのほかにも人物画、花鳥画等も描いており、吹田市内にも何点か作品が残されています。(写真右・下等) それらについては詳しくふれることはできませんが、いずれも画法に通曉した雪操の技量をしのぶことができます。



▲「鍾馗図」早田家蔵

嘉永5年(1852)頃の作品。鍾馗図は中国の故事に基づく画題。力強く、大胆な筆使いで生き生きと描き出している。

◀「梅竹図」高浜神社蔵

梅、竹は水墨画の画題としてよく扱われるもので、軽妙なタッチで墨の濃淡と余白をいかして描いている。

寄 贈 資 料

(平成2年2月21日より平成3年2月12日現在)

寄贈年月日	寄贈者(敬称略)	寄 贈 品 名	(数量)
2. 3. 7	岩 田 庄太郎	山田養鶏組合旗	1点
2. 3. 17	山 野 幸 男	卒業証書、地券	32点
2. 7. 16	山 口 正 作	アカシ象の牙	1点
2. 9. 10	中 川 和 市	万博公式ガイド・マップ、入場券 他	4点
2. 9. 13	本 田 康 恵	『日本万国博覧会』上・下巻、日の丸寄せ書き	2点
2. 9. 13	内 田 ミ ヤ	『支那事変の経過』	1点
2. 9. 13	池 田 日出子	万博記念切手、マップ、入場券、写真集 他	53点
2. 9. 14	伊 藤 儀 作	万博マップ、入場券、金盃	3点
2. 9. 18 19	荒 木 方 行子 泰 子	日の丸、従軍盃、国債、戦争傷害保険証書 他	10点
2. 9. 19	中 沢 恭 一	旅行かばん	1点
2. 9. 20	株 協 和 設 計	『21世紀への創造』	1点
2. 9. 21	中 山 嘉 代	戦争絵葉書、押し花	2点
2. 9. 26	小 林 真 一	万博入場券、ガイドマップ、ガイド、記念メダル、パピリオンパンフレット 他	41点
2. 9. 28	杉 崎 智恵乃	ガス燈	1点
2. 9. 28	山 本 一 軌	万博ガイド、記念切手、葉書、旅行ガイド 他	5点
2. 9. 30	山 崎 晴	かばん、銃弾、ラジオ、サーベル、ランプ 他	8点
2. 10. 30	荒 木 こ う	絵葉書	1点
2. 11. 4	岡 戸 隆	双眼鏡	1点
2. 11. 8	岡 田 保 造	万博パンフレット、パピリオン建築部材、阪急電車・万博当時運行標識	3点

御協力ありがとうございました。

寄 贈 民 具

(平成2年2月21日より平成3年2月12日現在)

寄贈年月日	寄贈者(敬称略)	寄 贈 品 名	(数量)
2. 4. 14	岸 田 隆 雄	衣類、飲食器、結髪化粧道具、家具調度品 他	151点
2. 4. 14	榎 原 大 治	カラスキ、マンガ、ジョレン、皿カゴなど農具	13点
2. 4. 14	古 谷 マツ子	唐箕	1点
2. 4. 19	寺 西 透	ジョレン、サラエコ、クマデ	3点
2. 7. 3	高 浜 神 社	千歯扱き、鍬など農具、ランプ、銭箱 他	48点
2. 7. 13	竹 内 幸 雄	ジョレン、筋引き	3点
2. 7. 16	山 口 正 作	矢立て	1点
2. 9. 1	鍋 島 敏 也	備前中瓶、丹波油壺、摺り鉢	3点
2. 9. 19	佐 井 寺 伊射奈岐神社	鳥衾、軒丸瓦	3点
2. 9. 30	山 崎 晴	フゴ、お櫃、バリカン	3点
2. 11. 24	野 口 三 郎	とおし、糸車	2点
2. 12. 14	南 野 幸 夫	樋、水車、整経台、かせ車、伊勢お札	7点
2. 12. 22	野 本 晋	鍬、鋤、笥あげ、籠など	15点
3. 1. 22	辻 本 誠 一 西 野 千 蔵	尾つき草履	2点

御協力ありがとうございました。